

朝鮮

引揚げの記

奈良県 野口 瑛子

昭和五年三月三十日、福岡県遠賀郡芦屋町で私は生まれました。母は実家である「山香屋旅館」に初子を産みに帰ったのである。

兄夫婦に子供がなかったので山香屋にとって初めての孫。曾祖父、祖父、それに父が集まって「今か、今か」と私の産声を待っていたと、何度も母から聞かされていた。

自分の出生が待ち望まれていた、という満足感が一生をずっと支えてくれている。

父、麻生退三は若松市海岸通り一丁目、石炭卸商を営む麻生米吉の次男であった。石炭商の前には質屋をしていた、と父から聞いたことがある。

父は大学を卒業して法律事務所に一時勤めた後、八幡製鉄所に就職した。昭和二年の初任給が七十円、これが東大卒だと七十五円だったとか、初任給の話のついでに思い出すままに書いてみる。

昭和二年に両親は結婚したが、そのときの母の留袖が百円だったと聞いている。

昭和十一年、私の小学校入学に父は赤いランドセルを買ってくれたがそれが三円、茶が主流の時代にさぞ目立ったことだろう。

娘の入学を機に両親は家を探したようだ。それまでは、海岸通りの祖父が残した屋敷の母屋に隆司伯父一

家が、隠居所に私どもの一家、中央の元事務所と二階には、高橋さんという人が借りておられたし、一番端には諭吉夫妻が住み、私はこの叔父の家に入り浸っていた。昭和十年三月、妹直子はここで生まれた。

祖父の世話のためか芦屋町に中古の家を買った。祖母の家から歩いて二十分ほどの岡湊神社のすぐ近くの船頭町に家はあった。

六畳三間と三畳、台所と板の間、トイレは廊下のはずれ、風呂場は倉庫の隣でポンプで水を汲み入れた。百坪余りの土地とその家は五百円、屋根や塀の改修費、造園に五百円、都合千円かかったと、一年生の私に對等に話をしてくれた。

引越して一年ほどして父に召集令状がきた。昭和十二年の秋、二年生の私と二歳の妹、そして母のお腹には弟がいた。

火野葦平さんと同じ時期に中支に出征し、杭州湾上陸に参加した。だが、何でも私に話した父だったが戦争の話は一切しなかった。

帰還した時、母の背中のはじめて見る息子、弟の頬

をつついていた。

帰ってきた父は、芦屋町から現在の北九州市、八幡製鉄所の本事務所までバスと電車で一時間半余りかかったが、再び通い出した。

当時、隣近所にサラリーマンは少なかった。すぐ隣は提灯屋さん。岡湊神社の祭りには、各戸の名前を書いた提灯が境内を飾った。おじさんは仕事の合間に琵琶をひいていた。その一軒隣は傘屋さん。おじさんとおじいさんが傘骨に紙を張り、渋を塗る、その渋のにおいがブンブンしていた。天気の良い日には、隣や向かいの空き地に一斉に傘の花が咲いた。うちのお向かいには染物屋さん、おじさんが店先で一日中紋を描いていた。戦後、塩のない時、海水を煮つめて製塩しておられた。その隣は竹屋さん、やはり親子で竹を割り、かごやザルを作っておられた。

八幡製鉄所の起業祭が年に一度あって家族が招待された。真っ赤な、ドロドロと流れる溶鉱炉の鉄を息をのんでみつめていた。また、父の事務所へ行ったときに、草履をはいた母がステンコロリンと転んだこと

などを思い出す。

ご近所のように一日中家にいて仕事をする家が多かった中、サラリーマンの父の仕事場を見学する機会があったのである。

その父に転勤の辞令が下ったのは、昭和十六年の正月ではなかったろうか。当時の満州の国境に隣接した、北朝鮮の咸鏡北道清津府に八幡製鉄清津製鉄所があった。

清津は日本海に面していて、内地の敦賀との間に航路があり、私どもが清津に転居する少し前（昭和十五年ごろか？）に客船が沈没するという海難事故があった。機雷に接触したためだったと記憶している。仲良しの宇野とめ子さんの兄上も亡くなられ、その追悼集を見せてもらったことがあった。宇野さんの父上は老齢で働いておられず、下の兄さんの杜宅であったので狭かった。宇野さんはソ連参戦で父上と山中を逃げ回り、二人とも亡くなった。

西の黄海側には、兼二甫製鉄所があった。父は一足先に赴任したが、母と子供たちは五月に転居した。母

の兄が四十歳の若さで脳溢血で死亡したので、父は葬儀にも帰ってきたが、私どもを迎えにも帰ってきませんでした。

父が最初に赴任をした後に、この伯父一家と、祖母に私が加わり、宮島や岡山の後楽園を旅行したが、まさにお別れ旅行であった。私がクラシック好きになったのは、戦後この伯父の遺愛のレコードを聞いたからである。

さて、私と妹は、福岡県芦屋小学校から羅南小学校へ転校した。私は六年生、妹は一年生で、小学校には会社に通学バスを出してくれたが、面白いことに、いつも一番先に乗るのは社長令嬢、おつきは庶務課長令嬢であった。小学校まで歩くと少なくとも小一時間はかかった。

北九州から清津までの交通経路を記してみる。まず下関から釜山までは関釜連絡船、夜に乗船して朝には釜山に着く。余談だがその夜、船内放送で「都城の高橋さん、高橋さん」と呼び出していたのを未だに覚えている。それから京城まで広軌の鉄道は、確か「あか

つき」という名前ではなかったらうか。

一泊して、また汽車に乗って羅南に到着。製鉄所の社宅に入居した。初めは地名そのままの油坂社宅といっていたが、後に春日台となった。丘陵地にあり、バスに乗る順序のごとくに一番高い場所に三鬼隆社長の社宅があり、下に行くにしたがって、階級が下がって親の地位が一目りょう然であった。(昭和二十七年の木星号事故で三鬼社長は死去された)

わが家は八畳、六畳二間、三畳の間と四畳のサンルームに台所、オンドルのたき口が竈で、そこで御飯を炊き、電気コンロで料理を作った。風呂は石炭でたき、トイレは水洗であった。暖房はベチカとオンドルで、厳寒の冬も外は零下十度以下だったのに、室内は暖かかった。

社宅には診療所、購買部があり、十三年生まれの弟が入学したところには、製鉄所の社員子弟の小学校が開校、劇場も神社も建てられた。クラブも所長社宅の近くにあり、丹羽文雄氏の講演も聞き、レストランで食事をした。

北朝鮮の春は美しかった。内地で桜を見て転居したのに五月に再び桜見物。野山は一遍に彩られ湿原一面に野ばらが咲き、山にはスズランがかれんな花をつけた。

羅南公立高等女学校の校章はスズラン、通称、鈴蘭高女と呼ばれていた。校門から玄関までの両側は桜並木、赤レンガの校舎であった。

社宅の東側を三十分も歩くと日本海で、魚釣りに行った父が時々アザラシをみたそうだ。

十七年の春、羅南公立高等女学校に入学。当時の内地では、クラスの五、六人が進学していたが、外地ではその反対に、ほとんどの人が女学校に進学。満州には女学校がなく、満州から五、六人が私どもの学校に入学して寄宿舎にいた。

こうやって希望に胸を膨らませて入学したのに、ともに勉強ができたのは二年間だけ。英語も敵性語という理由で授業が無くなり、論語を学ぶにしても教科書が不足していて、友人と一緒に書き写して手作りした。

羅南は清津府の南方にあり、咸鏡北道の行政の中心であった。女学校のすぐ北隣には警察署、続いて道庁、その北側は羅南駅であった。駅の北西の小高い所に知事公舎、一級上と一級下に令嬢の姉妹が在校していた。女学校向かいの西側には道立病院、クラスメートの瓜生さんの父上は医師であった。また、市街の西大半は軍隊の敷地で師団があり、軍人官舎が建ち並んでいた。クラスの中には、三、四人の裕福な北朝鮮のお嬢さんたちが一緒に勉強していた。

話を現在に移す。「奈良県の女性史」を作る企画がたてられ、何年間かの調査期間のうえで平成七年に完成したが、私はその調査員となった。

いろんな分野に分かれて仕事をし、私は「戦争班」に所属していたが、生まれた年代でこうも考え方が違うものか、と驚いたことがある。「召集令状を何故、拒否しなかったのか」、「食べるのに困って外地に行ったの？」など答えるのに窮した。

「外地に行って良い生活をしてきたくせに」と、引

き揚げて苦勞したって当たり前のような言われ方をしたときには、正直言つて腹が立った。

これについては確かに、五十年以上も前に水洗便所を使い、調理に電気コンロを使用したのだから良い生活をしたかもしれない。それに、前述のように指導者階級はみな日本人であったから、朝鮮半島の方々はさぞ、口惜しかったに違いない。

私どもが転居した昭和十六年、年末には太平洋戦争が始まり、食糧も衣料も燃料も乏しくなってきたつあった。

私ども女学生は、羅北川の川原にソバを植えたり、油坂の丘陵地にカボチャを植えに行ったりした。植えに行つたが、収穫した覚えがないのは、台風の被害か。また、松根油を取りにも行き、鏡城農業学校には、松や杉の苗の間引作業に何度も行った。そこでおやつに配られた、真っ黒いドングリパンが楽しみであった。

師団の中の兵隊さんたちの靴下の修理にも通い、昼

食やおやつを頂くのが嬉しかった。

勤労奉仕以外に、女学生は看護婦の補助員となるべく勉強が課せられ、道立病院の医師から看護の勉強を受けた。そして実際に、病院で実務に当たったクラスもあった。

私のクラス松組は、羅南より二つ南の駅、朱乙にある陶器工場で軍隊用の食器を作ることとなり、二十年四月から家を離れ寮生活を始めた。朝鮮人夫婦と息子さんが私どもの世話をしてくれた。玄関側は表通り、裏には小川が流れていた。当初の食事は朝、晩共にワカメ汁のみで、私どもは音をあげ先生に訴え改良された。

また、軍隊の通信隊に行った級友もいた。希望者を募り、十二人の応募者があったとか。

二十年八月十三日に流された指令「二、三日山中に逃げよ」。そうすれば日本軍がソ連軍を撃退する、というものであった。しかし、応召された者は私どもの学校の先生や僧侶であり、二日後に終戦になると知っていたら、身の処し方も違っていたし、死なないで済

んだ人も多かったはず。山中に逃げた人たちに死んだ人が多く、山越えして平壤の方へ向かった。

ソ連参戦の報によって、八月十一日朱乙の下宿先に、学校の先生が急ぎよ迎えにきてくださった。

十二日、それぞれの家に帰り一泊して、十三日にはもう家を出ていた。動員先から帰宅したのを知って社宅の友人たちが会いにきてくれた。前述の宇野とめ子さんもその一人だったが、あのときが今生の別れ、髪の毛の赤い、目のクリクリした、はおの赤い人だった。

当時十五歳だった友人たちのことを記したい。

通信隊に行っていたSさんは、十三日朝、家から出勤の途中、通信隊から帰って来る同僚と出会って「二、三日分の身の回りの品を持ってこい」との指令を聞き、再び家に取りに戻った。その日の午後、通信隊に父上から「おまえが家を出た後に避難した家族が、お金を持って出なかつたので今から届ける」という電話があった。「私も一緒にいきたい」とSさんは

泣いたという。通信隊は山辺にあり、十三日は町中騒然としていた（私共も同日避難中町を通り抜けた）。

父上も家族にお金を渡したら家に戻るつもりで、母上が用意されたリュックサックも玄関に置いたままで出たので、後日下着に困ったそうだ。

一方、通信隊（女学生を含む二十人ほど）は十五日、国境に近い恵山鎮に向けて出発。ここで武装解除を受けた正規の兵隊さんは、シベリアに抑留となる。H中尉は朝鮮人に変装して女学生たちを南へと護送してくれ、威輿にたどりついたときの人数は十二人だったそうだ（途中で知人や家族と出会い別れた人がいた）。

当時、北朝鮮に侵攻してきたソ連兵は四人だとの噂らのうわさであった。取り上げた日本人の腕時計をずらりとはめていたとか、女あさりにきたとか。若い女性を頭を丸坊主にし、顔に墨を塗って変装、ソ連兵が来たときには天井に隠れていた、と聞いたものである。Sさんも肩をつかまれ引き寄せられた時、朝鮮のおじさんが制止してくれたそうである。また、逃避中

の日本人たちが寄り合って生活している場所へ、ソ連兵が女あさりにやってきたので、みんなで缶を叩いて追いつ返したという。

Sさんたち通信隊の勤労学生がH中尉と共に、無事博多に帰ってきたのは敗戦から五カ月目の昭和二十一年一月末であった。

小学校入学前に朝鮮に渡ったSさんは、天草が故郷であると知っていたが、正確な地名は覚えていなかった。ただ、以前祖母からきた葉書に「水瓜木場」と書いてあったのが珍しくただ一つ覚えていた。が、実の話両親や兄弟がどこに引き揚げたかはわからなかったのである。

博多から熊本、三角と汽車に乗り、天草に船で渡ったときは夜も更けていた。馬車屋まで行くと、親切にも旅館を教えてくれたうえ、翌朝、馬車で迎えにきてくれた。「水瓜木場」までは行かなかったので途中で降り、歩いていると小学生に出会った。尋ねると、「僕たちそこへ帰るので一緒に行こう」と言ってくれ、しかも一人は親類の子であった。

幸い両親兄弟はそろって「水瓜木場」に引き揚げていた。一つ違いの兄さんは、妹が帰ったことを一山越えた父上の職場まで夜、山越えして伝えに行き、翌朝二人は大きな鯛を抱えて帰宅したそうだ。

級友Tさんは、社宅より港に近い場所に住んでいた。清津港から聞こえてくる艦砲射撃の音は、十二、十三日社宅にも激しく聞こえていた。

ソ連兵の上陸に、父親と妹、母親と祖母、Tさんと弟妹の三組がばらばらに逃げ出し、Tさんたちは防空壕に縮まっていたらソ連兵が入ってきて「スタンダードアッブ」というところを「シットダウン」と反対に言って、外に出してくれた。

落ち合う場所が定めてあったようで、父上と妹それにTさんたち三人と出会うことができた。責任感の強い父上は「自分はこれから家に戻って、警防団の役目をしてくる」と弟妹三人をTさんに預けて戻って行った。そして父上も母上もおばあちゃんも、ついにTさんたちの住む大阪には戻って来なかった。

私、がTさんたち四人と出会ったのは、京城の収容所

であった。朱乙の動員先から一緒に帰宅して十日目であった。父上が日鉄関連の仕事をなさっていたようなので、私どもと同じ芳山小学校に収容されたのである。共同の炊き出しに各戸から当番が出たが、母が出ているわが家と違い、彼女が出ていた。

四人でたどりついた大阪。駅前の曾根崎警察署に助けを求めた。

市内は空襲で灰塵に帰し、駅前から高島屋まで一望できたそうだ。幸いに叔母さんの家に寄留させてもらえたが、妹さんが戦後結核で亡くなった。友人ながら偉いなあと思う。

もう一人の友人Oさん。彼女は岡山に引き揚げたが、長崎の親類の所へ行く途中、北九州のわが家が何度か泊まってくれている。

羅南高女の先生が、引揚げ後、熊本で先生をしておられたので、一緒に下宿させてもらい一時通学していた。恋人もできて、希望にあふれた手紙をよく送ってくれていた。

そのOさんは、家族が三十八度線を越える条件とし

て、朝鮮の自警団の男からOさんを差し出すよう求められたという。そのときに移された性病がその後のOさんを苦しめた。親友の私には楽しい、希望のある話しかしなかったのに、近くの上級生には度々注射代を借りていたそう。そして妹さんと同居していた時、ついに縊死してしまった。Oさんは前夜初めてこの真相を妹さんに告げた。私は二十年後に妹さんからこの話を聞いた。

SさんもTさんもそしてOさんも、当時たった十五歳の少女であったのに。書いていても涙が出てくる。

さて、ここに父の書き残したメモがある。煙草の空き箱に小さく書いていたのを母からもらい、長男の弟に渡していたのを拡大してもらったものだ。達筆だった父の残した唯一の筆跡である。(引揚げ後七年目に家が全焼した)

「昭和二十年八月十三日午後三時三十分社宅出発」

「午後七時羅南護国寺宿泊」

この護国寺は通常、高野山と呼んでいた、女学校入

学後、間もなく結核で亡くなった級友の家である。私も避難の教家族が泊めてもらったときは、家族はすでに避難しておられ、義兄の和尚さんが留守番をしておられ受け入れてくださった。この住職は、十四日か十五日に出征され、みんなで見送った。最近聞いた話によると、日本に無事に帰って来られて九州だったかに、ご健在とのことである。

「十四日護国寺滞在」

この日、父たち、男の人が軍隊に食糧をもらいに行つたと記憶している。

「十五日午後六時護国寺出発」

簡単に書いてあるが、この日の空襲はすごかったので震えながらお寺の押し入れに隠れていた。母は子供たちを抱きながら念仏を唱えていたが、どうしたことか父だけ外にいて「オーイ、オーイ」と私たちを捜す声があった。押し入れから外に出て「ここにいるよ」と答えられぬほど、ソ連機の爆撃は激しかった。

護国寺は羅南の町はずれ、鏡城峠の入り口にあった。鏡城は孔子廟のある、由緒ある古い町であった。

この峠を越えて農業学校への勤勞奉仕に通つたので、家族の中では私が一番この道に詳しかった。

午後六時、八月十五日の陽はまだ落ちていなかったのだから。峠を登って行く我が家族にソ連機が機銃掃射をしてきた。慌てて道の脇の高梁畑に飛び込んで危うく難を免れた。戦後映画「禁じられた遊び」の冒頭の画面には目を伏せてしまった。母親が機銃掃射から子をかばって覆いかぶさり、背中を打ち抜かれる場面が大変よく似ていたからである。

「午後十時三十分鏡城駅着」

「十六日午前十二時三十分鏡城駅発」

避難列車が出るというニュースを人づてに聞いてお寺を出発、鏡城峠を越えたのだった。しかし、これが最後の避難列車だとは知らなかった。また、疲れ果てた父が「孔子廟に泊まろう」と言った時、私は「ともかく駅まで行ってみようよ」と家族を促したのだった。いろいろな幸運が重なり最後の列車に乗り込んだ。そして牛馬を運ぶ貨物列車の床に座り込んだ。

「十六日午前四時三十分明川駅着、待避」

「十六日午後五時三十分明川駅発」

明川駅付近に避難民がいたのは八時間、あの事件はこの日だったに違いないと思う。明川付近の住民たちは南へ避難してそこは無人の村であった。「待避」とあるのは、また、ソ連機が列車めがけて爆撃してきたので、それから逃れるためである。

避難民たちは自分で食べ物を探さねばならなかった。何しろ「二、三日山へ逃げよ」ということで少量の食べ物しか持って逃げていない。

父は四人の子供たちの腹を満たすべく、放し飼いの鶏を追いかけ捕まえ、母は畑の馬鈴薯を掘り鶏と共にゆでて食べさせてくれた。このようにして、内地に帰るまで飢えたことはなかった。

また、列車が出るまでの間、避難民たちがぞろぞろと文房具店に入ることがあり、私はなぜか家族と離れてその中にいた。かくして我々は商品を手当たり次第、手に取っていたのである。その時、中年の男性が皆の前に立ちはだかり「みんな、日本人の誇りを忘れたのか！」と叫んだ。私も鉛筆と消しゴムを手を持つ

ていた。避難民たちははっとわれに返り品物を元に戻し、すぐごと店を出ていった。

「十七日午前四時明川次の駅（吉州）着、待避」

「十七日午後一時明川次の駅（吉州）発」

ここで終戦の報を線路の上で、男の人から聞いた。

信じられなかったが、ホッとしたのも事実だ。十七日までソ連機は列車を襲撃した。幸い私たちの列車に被害はなかったが、他の列車は爆撃されたと聞いている。これは我が列車の運転士の判断の的確さによる。

ソ連機が来るより早く何度もトンネルに入った。

終戦になったが、それでは家へ帰ろう、という動きはなかった。父親たちの判断もあつたのであろうが、

第一、交通機関がなかった。

今も思うのだが、あの避難列車はこの指令で動いたのであろうか。折も折、これを書きながら見たテレビで、大阪空襲のときに、地下鉄が心斎橋から梅田まで運転されたという話が放映されていた。地下鉄は防空壕にしてはならなかったし、電気が消えている時間にも地下にはついていた。これらを調べている人たち

がいた。

あの時代にお互いに助け合った日本人。お寺の和尚さんしかり。Sさんたち通信隊の女学生を内地まで護送したH中尉。天草の馬車屋のおじさん。私どもの興安丸が仙崎沖に着き浜辺に上がり、漁業組合で一泊させてもらったときの人々。皆の助け合い、思いやりで、私どもは今、生きている。ありがたいことである。

「十七日午後五時城津駅着」

二十日に発つまで個人のお宅に一泊、旅館に二泊している。この間、私の生理が始まり、用意などなかったので困つたがすぐ止まり、以後は内地の女学校に転校して健康が回復するまで止まっていた。

「二十日午後十二時三十分城津駅着」

「二十一日午後一時三十分京城駅着」

父はその足で日本製鉄京城支社を訪れた。その途中、すりに遭い、有り金を残らず取られてしまう。

その日私どもは電車道に座り込んでいた。頭の上で好奇心に満ちた目が自分たちへ、とはだいぶたつてか

ら分かった。北朝鮮からの避難民はまだ珍しかったのであろう。敗戦から六日目、家を出てから八日目であった。まだ米軍も進駐しておらず、三十八度線も定められていなかった。

二十一日は、「京城第一高女」に一泊、二十二日から日鉄社員専用の「芳山小学校」に泊まることになる。各家族に畳二枚ずつ借りて一教室に六家族ほどがいた。

父は、二十七日に朝鮮銀行に出頭しているが、その時預金はすでに封鎖されていた。

「二十八日、母へ帰郷の打電をなす」

電報局は機能していたので母方の祖母へ電報を打ったのだが、祖母はどんなに嬉しかっただろう。終戦以後長女（母）、満州の次男家族の消息がつかめなかったのだから。

私もより一年遅れて、叔父たち七人が帰国した。

叔父は税関に勤めてそのころ新京にいた。幸い、祖母宅は旅館だったので、寝具類、食器類は十分わけてもらえた。

三十日、遠縁の家に家族そろってよばれた。

「九月二日、京城を出発」

「三日、釜山着、第一国民学校投宿」

「四日、釜山出帆」

興安丸に乗船するときは凄まじかった。抜刀した元軍人が乗船する避難民たちを整理しているのだが、敗戦というやりきれなさを乗船する人たちにつつけていた。混雑の中、家族と離ればなれになり船の中で泣いていたら、父が捜しにきてくれた。

「四日夕、正明市（現長門市）着、漁業組合に投宿」

「五日、正明市発、同日夕下関着、長泉寺一泊」

北朝鮮でも内地に帰ってもお寺であった。

「六日、芦屋帰着」

出て二十四日目であった。私の生まれた、芦屋町の祖母の家に帰る。

「九月七日、役場、警察に出頭す」

「九月八日、家屋明け渡しを依頼す」

昭和十一年に買った家を賃してあった。

「九月十五日、八幡製鉄所に出頭、後、若松の弟宅を訪問一泊」

十九日、祖母の家から船頭町の家へ引っ越した。しばらく、家を貸していた家族に次の家が見つかるまで同居した。

「十月八日、英子を伴い、折尾高女に入学手続に行く」

私は帰ってから下痢ばかりして体調が悪かったのが、ようやく回復したのだろう。この時、学校側から転校の条件として机といすを持ってくるように言われ、近くの大工さんに作ってもらったが、随分高かったのを覚えている。

「十月十三日、国民学校運動会開催」

弟泰久二年生、妹直子五年生はすでに芦屋小学校に転校していたようだ。

「十月十五日、八幡製鉄所出頭後、弟宅一泊」

十六日、諭吉叔父と共に芦屋に帰ってきた。

「十八日、諭吉君、若松に帰る」

この言葉でこの二カ月にわたる父の日記メモは終わ

っている。

この叔父とキクエ叔母はとても優しくかった。食べ物のないあの時代に私ども姉弟が泊まりに行っても、「ようきた、ようきた」といつも歓迎してくれた。この二人もすでに亡くなり一人娘が福岡在住している。

この十月十五日、八幡製鉄所に出頭した父は正式に退職したのであろう。昭和二年に入社して十八年間勤務したことになる。四人の子供たちは未成年、さぞ父は不安であったろう。

清津製鉄所時代、父の宿直の日、事務所が火事（ボヤ程度）となり、責任を感じて退職願を出したが、三鬼所長は受け取られなかった。そして昭和二十七年の木星号墜落事故で亡くなられた。ボヤ事件で退職して福岡へ帰っていたら、戦後少しはましであったかもしれない。

しかし、五十余年間私の背後にあった引揚げ体験は、今になってみるとよかったと思う。

故郷芦屋町は三里松原という松林が玄界灘に沿って続き、文字通りの白砂青松の景勝地であった。昭和十

七年、この松原を整地して芦屋飛行場が造られ、飛行第一二四部隊が駐屯した。昭和二十年八月十五日終戦となり、八月の下旬から米空軍の一部が入り、二十一年四月、全部の米空軍が進駐してきた。

女学校の帰り、木炭バスがなかなかこないのので、一時間以上かけて折尾から歩いて帰ることが多かった。そんなとき、遠賀川の堤防沿いで米軍のトラックが来るのを手をあげて止め、友人たちと乗せてもらったことが二度三度あった。

八幡製鉄所を退職した父は米軍の労働者となった(事務職はほとんど解任された)。芦屋で勤める前に板付飛行場に単身で行っていたときもあった。

明治三十一年生まれの父は、昭和二十一年当時四十八歳。三十七年生まれ之母は、四十二歳であった。母は得意の和裁で家計を助けようと、「お仕立ていたします」とはり紙を出したら、一枚も縫わぬ前に税務署の人がきてびっくりした。

また、米軍の命令で芦屋に国鉄が敷かれたのを機に、六畳二間を職員さんたちの下宿にして賄いもし

た。下宿の助役さんに音楽好きな方がおられ、「ライカの旅(と共に?)」という音楽紀行の本を貸してくだされた。このことも音楽好きになった要因で、ヨーロッパにも音楽関係で何度か行った。

コーラスも三十余年続け、フォトクラブに入会したり、写真を撮るのが大好きな人間となっていた。

昭和二十五年朝鮮戦争が始まり、朝鮮とは目と鼻の先にある芦屋基地は飛行機の爆音で大変だったし、町は急速に歓楽街と化した。祖母の家のある旧市街より町外れのわが家辺りにそれが著しかった。というのは基地へのメイン道路が近くに通ったからである。

近隣の市町村から「芦屋の娘は嫁にもらうな」と言われていたが、教会で知り合った夫と昭和二十六年の秋に結婚した。一軒隣のおばさんから誘われて戦後間もなくキリスト教に入信した。「食べるにも飲むにも着るにも思いわずらうな」の精神に共鳴したからである。

そして式から三カ月目の早朝、六十軒焼けた火事で類焼した。私どもは実家の裏のバラックにいたが、結

婚写真と借り物のラジオだけは持ち出した。次の日、焼け跡から結婚祝にもらったレコードのセットが、真ん中の穴があいたままの形で灰になっているのを見て泣き伏した。夫はそれを見てかわいそうに思ったのだろう。米人に頼んで、そのころまだ日本になかった三段自動切り替えのレコードプレーヤーを米国から取り寄せてくれた。貯金通帳には何十円しか残っておらず、夫の兄や姉にあきられれてしまった。火事の直後、丹前姿に赤い目覚ましだけを持ってうろうろしている父の姿が哀れであった。

引き揚げて六年が過ぎ、どうやら生活も落ち着いて矢先の火災である。火災保険料も前年末までは支払ってあったが、一月末のことで口約束だけで支払いが済んでいなかったので悲惨だった。

幸い、親類の建築会社の助けで二間きりの小さい家が再建出来たのである。その広い方の部屋で長女稚子が生まれた。そして私どもはやがて町営住宅に入った。四年後には長男も生まれたが、そのころ父はだいぶ弱ってきていた。

これより二年ほど前、娘を背負って実家に行くところまで母が泣いていた。「どうやりくりしてもお金が足りない」との話。そのころ父は、吐血してもう働いてはいなかった。妹がようやく高校を卒業し、弟たちは高校生と中学生であった。そこで夫の叔父に相談に行き、借家の間借りを頼んだ。姑の実家は大きな材木屋だった。

前述したように旧市街よりわが家の辺りの家賃が高かったので、新築した方の家を賃したのである。父はその借家の間借りの部屋で近くの町医者に診てもらうだけで、手術もせず入院することもなく五十八歳の生涯を閉じた。

恵まれた前半生に比べ、引揚げ後の十年間は誠に不遇の晩年であった。しかし、この父のおかげで、母をはじめ私ども姉弟四人の家族は誰も欠けていない。

長女の私、六十八歳、二度の癌手術を乗り越えて元気に暮らしている。夫、子供二人それぞれの配偶者と孫四人で十人のファミリー。

妹、六十三歳。高校を卒業して先年定年退職するま

で、働きづめであった。小さいころは体が弱かったのに……。今、老母を看護してくれている。

長男の弟は父の死後上京。自力で大学を出て書道家となった。書道関係の出版社に勤務。

末の弟は、北朝鮮の社宅で生まれ四歳のときに引き揚げてきたがすでに五十七歳。

ありがとう！ お父さん。

母と私の数え歌

香川県 大林 充

我が母、大林き乃。明治三十六年十一月七日、茨城県猿島郡古河町にて、旧水戸藩十宮下長四郎、母タツの次女として出生。だが幼時、母とは生別、続いて父を事故で失ったため、祖父宮下曾之助のもとより、時には横浜、ある時は九州の長崎、更には朝鮮京畿道開城の親族の所を転々とさせられ、悲しく辛い生活を余儀なくされたようである。従って、その辛酸を舐め尽

くした過去を、母は私たちにあまり語ろうとはしなかった。それよりもむしろ、横浜の叔父叔母のハイカラな暮らしぶりや、長崎県五島で聞き覚えた面白い方言などを、さも懐かしそうに繰り返して話して聞かせるのだった。

朝鮮の叔父の所での、狩猟を趣味とした叔父が飼っていた二頭のポインターの話、鹿に似た「ノロ」という獣を、母自らさばいたこと、あるいは狐や兎のさばき方など、小さな子供だった頃の私にとっても、ワクワクさせられる興味深いエピソードとして、今も鮮明に記憶に残っている。

昭和四年、二十六歳になった母は、縁あって、我が父、大林勝巳と婚姻。京城府林町に最初の居を構えた。翌五年八月には長女保子誕生、同七年十二月長男充、同十年次男勝、同十二年次女郁子（死じ）、同十五年三女孝子と五人の子をもうけた。

父は結婚前、叔父から譲り受けた京城府明治町の手芸材料店を、隣家からの類焼で失い、経済的にも苦境のどん底で母と家庭を持った。そのため事業が安定す